



→2011年1月。風は穏やか。海なら、べた凧だ。今年、世界一になるスカイツリーがひっそりと立っていた。

↑去年は画面右側に連なって停車していた車が、今年は左側に止まっていた。たぶん意味はないと思うのだが、つつい習性で“なんで？”と考えてしまう。今年も多念な年になりそうだ。

穏やかな年明けだった。

「三〇度だよ、三〇度」

そういつて舟頭さんが騒いでいた年末の寒さが、年明けとともにがらりと変わって、一週間ちかくたつたいまも嘘のような陽気だ。

その意味では時の流れにも“きり”があるのかもしれない。

“きり”といえは「終わり」を意味する言葉で十二月のことだ。すると次に来る一月は「始まり」なのだ。

寒さは十二月で終わり、暖かくなつたと考えれば、まあつじつまがあう。

うっかりしていて、そのことに気づかなかつた。

話が横道にそれるが、一月はではなんというのだろうか。錆びつきかけた頭のコンピュータをフル稼働させたらでてきた。“ぴん”だ。“ピンからキリ”という慣用句があるが、あれだ。なんでも“ぴん”はポルトガル語のPINTAで、点の意味。そこから一になったのだそう。安土桃山時代の話らしい。

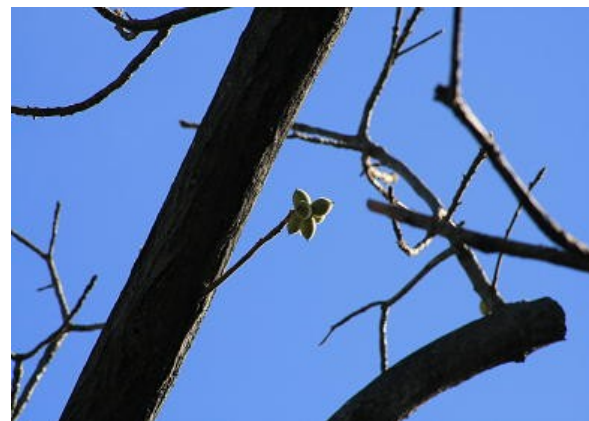
ポルトガル人が伝えたカードをもと

今週のクマ

新しい年を迎え、もっとはしゃいでいるかと思ったら、クマは意外にも、しらけ顔をしていた。犬にとっては、暮れも正月も関係ないのだから、こっちがそう思っているだけかも…。



→多念な年を象徴するかのよう、渡し場のクルミの木が一房、実をつけていた。栄養を取り込むはずの葉っぱは、一枚もないというのに……。



に天正時代にカルタがつくられ、それに
“ぴん”と“きり”があるそうだ。

だじゃれついでにいうと、なんでも田
沼意次の時代に考案されたものだそうだ
が、日本にはポルトガルのカード（トラ
ンプのようなもの）に勝るとも劣らない
カードに花札がある。

松、梅、桜、藤、菖蒲、牡丹、萩、す
すき、菊、紅葉、柳、桐の十二種類の植
物が月ごとに割りふられて四種類ずつ、
合計四十八枚からなる。

この最後の札が桐。つまり“きり”だ
から十二月のことをいうのだという説も
ある。すっかり話は横道にそれしまっ
たが、トランプも花札もそうだが、カル
タもまた四十八枚だ。

なかでも“いろはカルタ”にいたって
は、「いろは……」を使ってカルタにし
ただけだが、うまいぐあいに四十八枚に
なる。だれが考えたのか、ポルトガルか
らはいった四十八枚のカードが、博打か
ら遊びから、はては子育てにまで応用さ
れている。

悪から善まで。それこそピンからキリ
までではないか。すごいぞ、日本人。